
虎と小鳥

R A N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虎と小鳥

【Nコード】

N2390T

【作者名】

RAN

【あらすじ】

前世が虎であった記憶を持つ男子高校生。虎が唯一心を開いた、本来は捕食すべき存在の小鳥。しかし前世で悲しい別れをすることになった虎と小鳥。現世でその小鳥を見つけたその日から、虎である彼の生活は一変する。

サイト、dノベ転載

・そして、二人は出会いました。 - < 1 >

俺は覚えてるが、君は覚えていない。

昔々、ある森に、虎と小鳥がおりました。

虎は一人で生きていました。

誰も信じることなく、一人で生きていました。

小鳥はきれいな歌を歌って、森のみんなの人気者でした。

本来なら、小鳥と虎は同じ森にしながら、別の世界で生きている二匹でした。

虎は小鳥を食べ、小鳥は虎に食べられる、という関係のはずでした。

でも、小鳥は虎を怖がることなく、虎に歌いかけました。

すると、虎もだんだんと小鳥に心を開くようになりました。

二匹は、次第に仲良く話をするようになりました。

ですが、そんなある日、小鳥は子供の悪戯によって、石を投げつけられました。

当たった所が悪く、小鳥は死んでしまいました。

それを見て、怒った虎は、子供に襲い掛かります。

しかし、その子供の親がそれを見つけ、銃を撃ち、虎は殺されてしまいました。

俺であって俺ではないものの記憶がある。

子供の頃からこの記憶があった。

不思議な記憶を、俺はまず両親に話した。

だが、彼らは子供の言うことだと、信じてくれなかった。

夢のある話だと、作家の才能があるかもしれない、などと言っただ

けだった。

その後も、友人にも打ち明けたが、誰も信じてくれなかった。あまりにもしつこいと、今度は俺が妙な目で見られた。

だから、もう誰にもこの話をしなくなった。

そして、自然と人と関わることも億劫になり、一人でいることが多くなった。

もともと目つきが悪いせいか、そうしていると勝手に周りには俺を怖がって、誰も近寄ってこなくなった。

そうして俺は、その記憶のことはあまり気にしないように、今まで過ごしてきた。

だが、ここ最近夢を見るようになった。

小鳥と過ごした日々の夢を。

忘れようとしていたのに、なぜ今更、と目覚めるたびに気分が重かった。

だが、それは予兆だったのかもしれない。

その日は新学期だった。

俺も高等教育学校で三年目となり、いよいよ、色々な意味で責任がのしかかる学年になった。

そして、また新入生が入ってきた。

部活には入っていないが、万年図書委員の俺だから、多少後輩のことも気になる。

でも、それはあくまで、ちょっと気になる、程度だった。それが、日常に影響を与えることになるうとは。

・そして、二人は出会いました。 ・ < 2 >

通常どおり始業式を終えた俺は、別に当番でもなかったが、図書室に向かった。

図書室の空間は落ち着くし、図書室担当の先生も話しやすくて好感を持っていたので、図書室によく行っていた。

他の図書委員は、俺にはあまり近寄ろうとはしないが。

「こんにちは」

図書準備室に入ると、やはりそこには図書室担当のディース先生がいた。

「やあ、コガネ。そういえば、オルフ君が探してたぞ」

机に向かっていた先生は、俺に気づき、笑顔で迎えてくれた。

先生はエルフ族で、その外見もきれいだから、女子に人気がある。だが、この人はいつも笑っていて、何を考えているかわからない時がある。

しかし、この人は不思議と人を安心させる雰囲気を持っていた。

「オルフ……」

俺は思わず顔をしかめてしまった。

オルフは、一年次の時に出会って以来、やたらに絡んでくるヤツだ。

目立つ髪型なうえに、髪を脱色していて金髪のようにしているので、先輩から目をつけられていた。

そして予想どおり、先輩に呼ばれてランチ寸前の所を、俺が通りがかってしまったのだ。

俺の父親が格闘技好きで、子供の俺に何か習わせたい、と俺は柔道に小さい頃から通わされていた。

通わされていただけだから、最近はやっていないものの、性格のせいか、やたらにからまれることがあったので、半ば独学が入りな

がら、ケンカの仕方覚えてしまっていた。

この要素のせいで、うっかり巻き込まれてしまい、さらにはその上級生をのしてしまった。

結果的に、彼を助ける形となり、以来、オルフは何かと俺につきまとうようになった。

正直言つと、彼は責任も持てなくせに、やたらと人と衝突するので困る。

だが、慕ってくれるヤツを無碍に扱うこともできずにいた。

「まあ、そんな顔をするな。オルフも悪気があるわけじゃないんだから。せつかく仲良くなつたんだからな」

「悪気がないからこそ、困るんです」

「でも、あいつは一応場はわかまえるヤツだぞ。何もなくて騒ぎを起こすヤツじゃない。図書室に来て静かだし」

「……まあ、ここにいれば、アイツは見つけやすいでしょう」

「何だかんだ、お前らはいいコンビだと思うよ、俺は。持ちつ持たれつで」

「……俺は認めません」

「お前のそういうところがかわいいんだよな」

「気持ち悪いです」

この先生は、たまにこういうことを言っただけで俺を困らせる。

本気で言っているのかいないのかわからないから、なおさら困る。

・そして、二人は出会いました。 ・ < 3 >

「まあ、冗談はこのぐらいにして……さっそく図書委員候補がきてるよ」

デイス先生は、何だかいやらしい笑みを浮かべて俺を見た。

「……………かわいい女の子なんですか」

俺はその笑みを察して、呆れて言った。

「うん、ここから見えるから見てみるといい。今時いなさそうな、清純そうな子だよ。おさげの子」

俺も、興味が無いわけではなかったので、先生につきあって、準備室の窓から図書室を覗いた。

おさげの女の子を探して、図書室内に視線を巡らす。

それらしい子を見つけ、そこに視線を固定した。

すると、向こうもこちらに気づいたのか、振り返り 視線が合ってしまった。

その瞬間、俺は強い電気を体に通されたような衝撃が体を走り、体が固まってしまった。

「気まずさとかそういうものではなく、もっと違うもの。」

「……………どうした、コガネ？」

デイス先生は、俺の様子が変わったことに気づき、心配そうに声をかけた。

俺はその声で我に返り、慌てて取り繕うように笑顔になった。

「ちょうど、その子から視線をはずすきっかけにもなったので、よかった。」

「いえ、何でもありません。ええ、かわいい子ですね」

先生は、少し疑わしげに俺を見たが、すぐにいつもの笑顔になった。

「だよな。たぶん初々しい感じがあるから一年生だぞ。入学早々図書室に来るなんて、図書委員になりたい可能性大だ」

「まあ、それはわかりませんが、先生の期待どおりになるといいですね」

「なるさ。今まで俺の予想はずれたことがない。実はお前も最初から目をつけてたからな」

俺は笑顔を引きつらせた。

「今日は、この辺で失礼します」

「おう、今日は早いんだな。オルフはどうするんだ？」

「まあ……用があれば電話なりしてくるでしょう。一応彼は俺の携帯の番号してますし」

「そうだな。じゃあ、気をつけて帰れよ」

「はい、さようなら」

俺は図書準備室を後にした。

途端に、またさっきの興奮が蘇ってくる。

電撃が走った次には、鼓動が早くなった。

さっきは落ち着けようとしていたが、急に緊張から解放されると、また鼓動が早くなる。

ゆっくり歩いているはずなのに、全速力で走った後のようだった。

小鳥だ。小鳥がいる。

なぜかわからないが、そう感じていた。

根拠など何もなかった。だが、確信していた。

だが、彼女を見た瞬間に、一気に今まで見てきた虎と小鳥のことがフラッシュバックした。

そして、俺は、彼女は小鳥だと思った。

そう思うと、今まで頭の中になかった、いや、消そうとしていたのが嘘のように、小鳥のことで頭がいっぱいだった。

小鳥、小鳥に会いたい。

俺は、心の奥底では、小鳥を探し求めていたんだ、と実感した。
もう、どんなにないものと考えようとしても、その思いは消え去
ることがなかった。

そのことしか頭になく、危うく階段から足を踏み外しそうになっ
た。

・そして、二人は出会いました。 - < 4 >

図書委員会のミーティングは毎週水曜日に行われた。

新入生のオリエンテーションもちょうど終わり、彼らの初めての委員会活動になる。

そして、その図書委員のミーティングに、小鳥がいた。

「1年C組のミハル」アネザです。よろしく願いします」

小鳥　ミハルという少女は小さくお辞儀をして座った。

ミハルの声はその姿に似合って、ころころと鈴を転がしたような可愛らしい声だった。

聞いていて、とても心地がよい声だった。

俺はそれからミハルのことが気になってしょうがなかった。

図書室に彼女が来る時間帯に、俺も図書室に行くようになり、影から彼女を盗み見ていた。

理由がなくても、俺は何かと図書室にいたが、これがあってからは、いる時間が固定されるようになった。

我ながら、冷静に考えるとひどく気持ちが悪い行動ではある。

気づかれないことを願うばかりだ。

しかし、オルフやデイス先生にはバレてしまっているようで、俺が図書室に行くたびに、ニヤニヤと口元をゆるませ、俺のことを見るのだ。

俺はそれがしゃくにさわったが、反論ができないので黙って無視するしかなかった。

とりあえず、今日は俺が当番の日だったので、カウンターにおいて、

堂々と覗き見ができるわけだ。

自分でそう思っただけ、何か違和感を感じたが、考えないことにした。

「すみません、ちょっと聞きたいことがあるんですけど」

すると、カウンターの俺に声をかける人物がいた。

俺は顔を上げて、目の前の女子生徒の顔を見た。

顔を見た瞬間、俺は体中を駆けめぐる衝撃を覚えた。

目の前にいたのは、気の強そうな、良く言えば快活そうな女子だった。

金髪のポニーテールと、赤い目が印象的だった。

驚いたのは、彼女の特徴が、俺の前世で小鳥を殺した猟師にとってもよく似ていたのだ。

猟師は男だったし、もちろん体格など違うのだが、金髪といい赤目といい、もっている雰囲気がとてもよく似ていた。

しかし、思わず身構えてしまった体を、緊張からとかそうと、俺はわからないように小さく呼吸をして落ち着かせた。

そういえばよく見ると、この少女少し耳がとがっている。人間ではなさそうだ。

「はい、何でしょうか」

俺はつとめて落ち着いた声でそう言ったつもりだ。

「朝読書用に本を借りたいのですが、読みやすい本をおすすめしてください」

女生徒が口を開いた時にのぞいた八重歯で、彼女の種族がわかった。

吸血鬼だ。混血も増えて、夜に生きる、あまり人と交わらないような種族もこうして見るようになってきているので、さほど珍しくはない。

図書委員にこういう質問をしてくる生徒もたまにいますので、俺はだいたい適当な本のリストをいつも用意していた。

メモを取り出して、彼女に合いそうなものを選ぼうとする。
図書室なので、声をひそめてではあるが、彼女に質問をしていく。
彼女もその雰囲気を感じて、腰をかがめてこちらに近づいてきた。
あまり人と近づくことがないので、俺は少し驚いてしまったが、
気にすると逆に変だと思ったので、気にしないふりをつとめた。
吸血鬼は、そういうばあまり近づくののためらう者があまりいな
いように思う。

・そして、二人は出会いました。 - < 5 >

「読みやすい本ということ、あまり本を読んだりとかは普段しないんですか？」

「マンガぐらいなら読むけど……あまり字読んだりとかはしませんね」

「漫画は何が好きですか？ 恋愛もの？ アクションが激しいものとか、冒険ものとか？」

「少女漫画大好きです」

「よく見るのは、年代ごらのキャラが多いですか？」

「そうですね。共感しやすいし」

「笑える話とかの方が好きですか？」

「悲恋とか片思いものとかが好きです」

俺はそこで、手にしていたメモを数枚めくる。

顎に手をあててしまうのは、考えこむ時の癖でついやってしまう。

「それなら、『雪解け』という作品がいいかもしれませんね。棚番

号6番にあります」

俺がそう言うと、女生徒は満面の笑みを浮かべた。

「ありがとうございます。見てみます」

そう言うと、彼女は棚の方向ではなく、机が集まっている方へと向かっていった。

行く方向を見ると、ミハルがいた。

声をかけられたようで、ミハルは笑顔で応えていた。

俺には意外だったが、二人は友人のようだ。

思わず二人の様子を見てみると、本のことを聞いてきた少女が俺の方を向いたので、俺は慌てて視線をそらした。

目はそらしたが、視線は感じた。

俺のことを話しているのだろうか。気になる。

少し遠いので、話しているのはわかるのだが、何を話しているかまでは聞こえなかった。

まあ、聞こえるようではよろしくないのだが。

少しすると、視界に先ほどの女生徒が入ってきた。

本を取りに来たようだ。

そのまま女生徒は図書室から出ていった。

ミハルは、また先ほどと同じように窓辺の席で本を読んでいた。俺の図書委員業務は、あとは通常どおりに貸し出し作業を行い、終了となった。

「おい、今日声かけられた子可愛かったじゃないか。なんだお前。最近女運ついてるんじゃないのか？」

業務が終わって図書室を閉めていると、オルフが声をかけてきた。

「よくわからんが」

俺は思ったことをそのまま伝えた。

「そうだよなー、お前はあのミハルちゃんしか眼中にないもんない。でも、彼女あの子と友達っぽいじゃん。これはいいきっかけになるんじゃないか？」

オルフのその楽しそうな様子が、俺は非常にかんにさわったが、こいつはそれでもどこか憎めないところがあった。

「いい……きっかけか……」

俺は思わず眉をひそめた。俺には、悪い予感しかなかった。

「こんにちは……」

図書準備室の扉を開けて、入ってくる人物がいた。

いつも図書室準備室にいる、俺、オルフ、ディース先生の三人は、声のした方を向いた。

そこには、ミハルとこのあいだおすすめの本を聞いてきた女生徒

が
い
た。

・そして、二人は出会いました。 ・ < 6 >

俺は驚いてしまって、口を開けたマヌケ面のまま固まってしまっていた。

「おや、いらつしやい。何か用かい？」

デイス先生が落ち着いたいつもの笑顔でそう言う。

「あ、えーと、いえ、特に用事があるわけではないんですけど……」
「あ、はい。私が言います！ ミハルは、本することに詳しくうな先生とか先輩のお話に混ざりたいんだそうです。で、とりあえず私はそのつきそいで来ました。カナキタキといいます！ よかったらお話に混ぜてください！」

ミハルが言葉を濁していると、前にカナと名乗った少女が出てきて、勢いよくそう言った。

俺達三人は全員一様に面食らった顔をしていたが、とりあえず俺以外の二人は、その次の瞬間には楽しそうに笑い出した。

俺は、何だかあまりに大笑いするのもはばかられたが、二人の新生活の可愛さは微笑ましいと思ひ、思わず顔がほころんだ。

「男三人で話してるんですから、大した話をしてるわけではありませぬけど。むしろ、何を話してましたっけ？」

「さあ、俺もよく覚えてないけど。とりあえず君達の聞きたい話とか、自己紹介とかしてもらえばいいんじゃないかと思うよ。おいでおいで。ここに座って」

オルフは立ち上がって、俺達の周りに椅子を二脚持ってきて、手で指し示した。

二人の新生活もそれに従って、椅子に座った。

俺の印象では、ミハルはよく笑う子のように思ったのだが、どうも引つ込み思案というか、おとなしい性格であるようだ。

まあ、だいたい図書室が好き、という者でそこまで騒がしい者も見ることがないが。

そう思えば思うほど、このカナという少女との組み合わせは意外であった。

「なんか、二人って両極端って感じに見えるけど、仲がいいのかな？ あ、あとそうだ、ミハルちゃんが図書委員になった理由とかも聞かせてよ」

俺が思ったことを、オルフはそのまま口にしてくれた。

こういう時、こいつの性格は助かる。

考えれば、俺とオルフの組み合わせというのも、このミハルとカナに対する俺の印象と同じものかもしれない。

ただ、オルフはいつも一人であった。

誰とでも仲良くなれるし、すぐ溶けこむが、どこかに属することはなかった。

そういう所が、溶け込めない俺と合っていたと俺は思っている。

「んー、なんででしょうね。それを言うなら、皆さんの取り合わせも不思議ですけどねー。なんか気づいたら一緒にいた、っていうか。居心地よかった、っていうか。そういう感じですよ」

俺が思っていたことと同じことをカナも言った。

そりゃ、そう思うよな。

「うん、だよなー。俺もそう。コガネはなんか話しやすかったんだよなー。ってか、こいついじると楽しくてさー」

オルフも軽い調子で言う。

「おい」

オルフの聞き捨てならない言葉には、一応抗議の声をあげておくことにした。

「あはは、ワリイワリイ」

オルフは全く悪びれていない調子で言った。

まあ、実際の所、俺も薄々そう思っているので気にしないことにした。

・そして、二人は出会いました。 ・ <7>

「アネザさんが図書委員を希望した理由を、聞いてもよろしいですか？」

そこでデイス先生がミハルに顔を向けた。

話をふられて、ミハルは驚いたように震えて、デイス先生を凝視した。

デイス先生は、笑顔で首をかしげてミハルを見る。

俺もミハルの方をじっと見た。まあ、視線を向けるいい口実をもらえたのもあるが。

するとミハルは、俺の方にも視線を向け、視線が合うと慌てて視線をそらした。

少し視線をそらされてショックを受けたが、答えづらそうにしているミハルにどう言うべきか俺も困って、オルフとデイス先生に視線を向けた。

オルフもデイス先生も、笑顔で黙ってミハルを見ていた。

とりあえずその様子を見て、俺もならって黙っていることにした。

「あの、私もともと本は好きで、小学校も中学校も図書委員で、それでまた立候補したらうまくなれたので、なったのはそういう流れでした。でも、あの、先生とか、コガネ先輩の話を聞いて、お二人からもっとお話聞きたいな、と思って。色々なことを、知ってそうだったので……」

思わぬ所で自分の名前が出て、俺は驚いた。

俺は背が大きい、目が鋭いなどの外見のせいで、どうも人が近寄りがない雰囲気があるようだった。

そのせいで、俺自身も人を避けるようになってしまい、こういう風に自分が注目されることに慣れていなかった。

「そうだね。コガネはとても勉強熱心で、たぶん私よりも色々な本

のことを知っているとと思うよ。私は結局、自分の研究分野とか、趣味のものしか見ていないからね。偏ってるんだ。でもコガネは、本当に色々なものを見ているよ。ここにも、話すというより本を見ているからね。学校の図書室のは、もうひと通り見たらうし。ね？」

デイス先生が俺の方を向いた。

「え、あ？ あ、そ、そうですね……？」

俺は驚いて、思わず妙に裏返った声で、自分でもよくわからない返答をしていた。

「え？ あ？ あ、そ、そうですね？ 何焦ってるの？」

オルフがこらえるように笑いながらそう言ったのが、さらに悔しさを増長させた。

俺はオルフを軽く睨みつけたが、もちろんヤツはそんなこと気にしない。

ミハルの様子を見ると、俺達のそんな様子は特に気にした風もなく、何だか嬉しそうに俺達を見ていた。

何だか、彼女に見られるのは、妙な気分だ。

「それじゃあ、ぜひコガネ先輩に色々教えていただきたいですよ！ よろしく願います！」

俺に向ける視線は、何だかキラキラと輝いているように見えて、眩しくて俺はとてもまともに見ていられなかった。

ミハルに名前を呼ばれたことも、俺を軽く動揺させた。

それから、俺達の放課後の集いに、ミハルも加わるようになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2390t/>

虎と小鳥

2011年8月6日10時47分発行